

日本最大の弥生時代環壕集落跡

よしの が り い せ き
吉野ヶ里遺跡



見学の手引き

小学校高学年～中学生用



吉野ヶ里歴史公園

目次

1	吉野ヶ里遺跡とは	1
	吉野ヶ里遺跡の発見／特別史跡と吉野ヶ里歴史公園	
2	弥生時代の吉野ヶ里	3
	米づくりとムラのはじまり／環壕集落の発達／環壕集落とは	
3	吉野ヶ里の環壕集落	5
	南内郭／竪穴住居跡／物見やぐら／高床倉庫／南のムラと祭壇／北内郭	
4	吉野ヶ里の墓地と墳丘墓	11
	甕棺墓地／弥生人骨／巨大墳丘墓	
5	吉野ヶ里遺跡Q&A	14
6	吉野ヶ里遺跡関連年表	20

吉野ヶ里へようこそ



吉野ヶ里遺跡の位置

吉野ヶ里遺跡とは



吉野ヶ里遺跡の発見

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県神埼市、神埼郡吉野ヶ里町にまたがる丘の上にある今から2万年以上前の旧石器時代から室町時代(16世紀ごろ)の遺跡です。

特に弥生時代(約2400年～約1800年前)については、国内最大の環壕集落がつくられ、有柄銅剣やガラス製管玉をはじめとする貴重な資料が多数発見されるなど、日本を代表する遺跡となっています。

遺跡は大正時代末期に、地元佐賀県の研究者により注目され、昭和時代初期には学術雑誌などに発表されていました。

昭和50年代に入ると、工場建設などに伴う発掘調査が行われ、弥生時代の住居跡や甕棺墓が確認され、銅剣鑄型、炭化米などが出土しています。

昭和61(1986)年、佐賀県の工業団地計画による発掘調査がはじまり、平成元(1989)年に、大規模な環壕集落や墳丘墓が発見され、「邪馬台国時代のクニ」や「『魏志倭人伝』に記されている卑弥呼の集落と同じつくり」などと報道されたため、全国的に注目を集めました。このため、佐賀県の工業団地計画は見直され、遺跡の大部分が保存されることになりました。

特別史跡と吉野ヶ里歴史公園

吉野ヶ里遺跡は、弥生時代にムラからクニへの発達してゆくようすや王や豪族たちの出現を考える上で学術的にたいへん重要な遺跡であることから、平成2(1990)年に国の史跡、平成3(1991)年に国の特別史跡に指定されました。

平成13年にこの遺跡を保護、活用するために国営吉野ヶ里歴史公園としてオープンし、現在は、国営公園と県立公園が一体となった総面積約117ヘクタールの「吉野ヶ里歴史公園」として整備され、毎年、日本全国や世界各国から多くの人々が訪れています。



開園以来、毎年多くの人々が訪れているよ！



昭和30年ごろの吉野ヶ里遺跡



全国から集まった多くの見学者 平成元(1989)年



2 弥生時代の吉野ヶ里



米づくりとムラのはじまり

紀元前5世紀ごろ、中国大陸から朝鮮半島をとって北部九州に米づくりが伝えられ、やがて日本列島に広まっています。板付遺跡(福岡市)や日本最古の水田跡が発見された菜畑遺跡(唐津市)が有名です。

吉野ヶ里遺跡周辺では、これまでのところ水田跡は見つかりませんが「プラントオパール」とよばれるガラス質の稲の細胞が大量に発見されていることから、日本列島に米づくりが伝わるとほぼ同時に吉野ヶ里でも米づくりがはじまったと考えられます。



稲のプラントオパール

環壕集落の発達

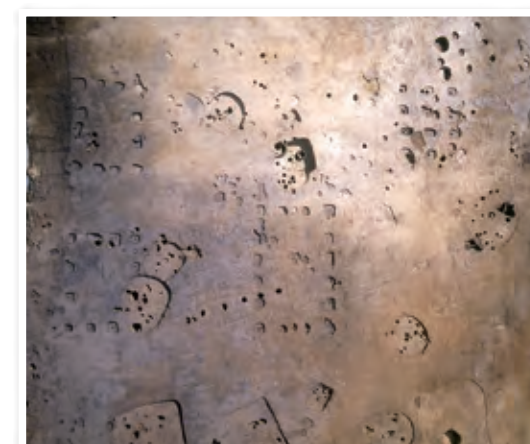
吉野ヶ里では、弥生時代のはじめに小さな集落がつくられ、やがて集落を取り囲む大きな環壕が掘られます。弥生前期には約3ha規模の集落が弥生中期には約20ha規模に発展し、弥生後期には40haを超える国内最大規模の環壕集落に発展します。さらに弥生後期後半には、王や身分の高い人たちが住んでいたと考えられる「南内郭」、最高司祭者が住んでいたと考えられる大型の祭殿をもつ「北内郭」、市が開かれていたと思われる高床倉庫群の「倉と市(くらといち)」がつけられています。

弥生時代はいつから？

弥生時代の始まりは、それまでの説より約500年早い「紀元前10世紀ごろ」(国立歴史民俗博物館)とする説もあり、教科書でも両方の説が書かれていますが、ここでは「紀元前5世紀ごろ」で統一しています。



弥生前期の環壕の断面(田手二本黒木地区)
…カキなどの貝がら、イノシシ・シカなどの動物骨が捨てられています。



弥生前期の集落跡(志波屋六の坪乙地区)
…円形のが弥生前期の住居跡です。

環壕集落とは

吉野ヶ里遺跡の大きな特徴の一つは、集落全体が大きな壕で囲まれた「環壕集落」であるということです。環壕集落とは、外敵からの防御のため、大きな壕で囲まれた集落のことを言います。吉野ヶ里の外環壕は、深さ3m、幅5m以上の大きさがあります。また、環壕の外側には、掘った土を盛り、その上に大きな木で柵が作られています、これを「城柵」と言います。

弥生時代は、米づくりに必要な土地や水などをめぐる“争い”が始まった時代と言われています。吉野ヶ里の人々も環壕を掘り、城柵を作って外敵から集落を守っていたようです。

さらに環壕集落の入口にある門の両側にも「逆茂木」と呼ばれるバリケードが作られました。当時、この場所には、武器を持った強そうな兵士が立って、集落をしっかりと守っていたのかもしれませんが。



門を守る兵士(北内郭)



復元された外環壕と城柵



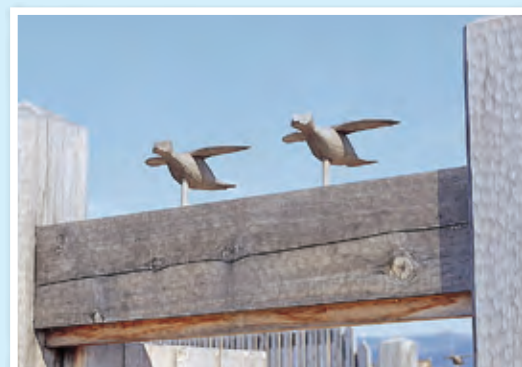
発掘当時(左)と復元整備された(右)逆茂木

とりがたもくせいひん 鳥形木製品

弥生時代、鳥は稲などの穀物の霊を運んだり、外部から侵入する悪霊から守ってくれる神の使いとされていたようです。

鳥形木製品は吉野ヶ里遺跡の近くの託田西分遺跡(神崎市千代田町)から出土しています。

吉野ヶ里歴史公園の門の上には、木で作られた鳥形木製品(鳥の模型)があるので探してみてください。



鳥形木製品(鳥の模型)

3 吉野ヶ里の環壕集落

みなみないかく 南内郭

弥生時代後期前半(紀元1世紀ごろ)になると、集落を取り囲む大きな環壕である外環壕が掘られます。この外環壕は、後期後半(紀元2世紀ごろ)には吉野ヶ里の集落全体を取り囲んだと考えられ、その囲まれた広さは南北約1km、東西約0.6kmの約40haになります。この外環壕に囲まれた集落の中心付近では、「北内郭」と「南内郭」とよばれる場所があり、一帯からは、当時貴重だった鉄製品が多く出土していることから、吉野ヶ里をおさめる王や身分の高い人たちが住んでいた場所と考えられています。

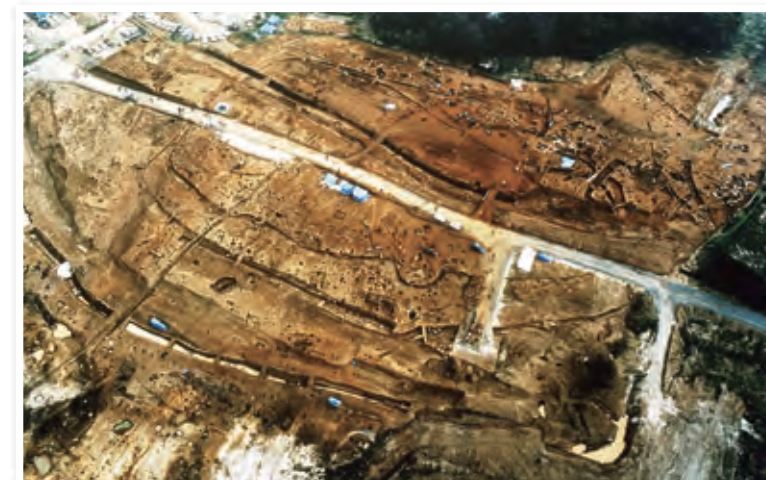
南内郭は、二重の壕(内壕)で囲まれています。この内壕には4か所の半円形の張り出し部があり、その内部には物見やぐらとみられるほったてばしらたてものあと掘立柱建物跡があります。



外環壕…断面がV字形です。



内壕…断面が逆台形です。



発掘調査中の南内郭(南西から)



復元整備された現在の南内郭(南西から)

南内郭の広さ

弥生時代後期後半(2世紀ごろ)の広さは約7,800㎡ですが、弥生時代終末期(3世紀ごろ)になると壕が掘り直され、広さも約11,000㎡と拡大されています。

また、南内郭の中央から南にかけては、竪穴住居などの住居がないことから、広場のような場所であったと考えられています。

たてあなじゅうきょあと 竪穴住居跡

弥生時代の人々は、地面を1mぐらい掘り下げて床を作り、柱を立て、その上に屋根をかけた建物である「竪穴住居」でくらしていました。弥生時代前期後半～中期前半(紀元前2世紀ごろ)の竪穴住居は直径が3～10m程の円形をしています。弥生時代後期(紀元1世紀ごろ)には、一辺が4～5m程の長方形や正方形の竪穴住居へと変化し、中に一段高い「ベッド状遺構」と呼ばれる寝床をもつ住居跡が増えていきます。

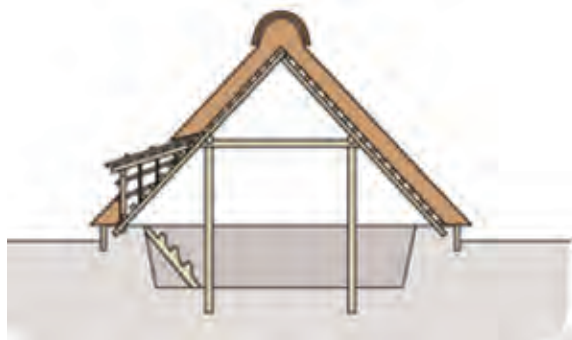
竪穴住居内には、火を焚いた「炉跡」も確認されていますが、半地下式のため、外の気温の影響をうけにくく、夏はすずしく、冬はあたたかい、想像以上にしやすい住まいだったようです。王や身分の高い人たちがくらす家と一般の人々がくらす家にそれほど大きな違いはありません。



竪穴住居跡(弥生前期後半～中期前半)



竪穴住居跡(弥生後期後半)



竪穴住居の断面図



復元された竪穴住居



竪穴住居での生活の様子

王の家

南内郭では、発掘調査の結果、中央の広場を囲むように10数棟の竪穴住居が同時に存在していたことがわかりました。さらに、南内郭の中で一番奥まった場所に「く」の字の溝で守られた竪穴住居があり、「王の家」として復元されています。

物見やぐら

南内郭の「物見やぐら」は、内壕の一部が外に張り出しており、ここから大型の6本柱の建物跡が見つかりました。中国の歴史書である『魏志倭人伝』に、「卑弥呼」が住む「邪馬台国」には、「楼観」と呼ばれる立派な物見やぐらがあったと書かれているので、この建物跡がそれにあたるものとして復元されています。

このような張り出し部をもつ弥生時代の環壕集落跡は、古代中国の城の影響を受けていると考えられ、吉野ヶ里遺跡のある佐賀平野東部や筑後川流域にしか存在しないことから、「邪馬台国九州説」をうらづける理由の一つとなっています。

吉野ヶ里が邪馬台国だという説もありますが、吉野ヶ里の環壕集落が最盛期であった弥生時代後期(紀元3世紀ごろ:現在建物などが復元されている時期)の王や身分の高い人たちの墓が見つからないため、まだ謎のままとなっています。



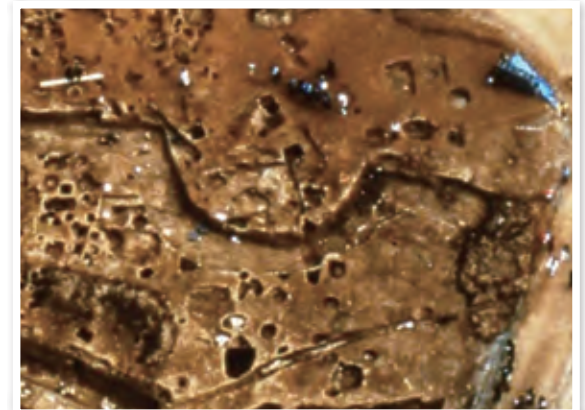
古代中国の城
…方形や半円形の張り出し部があります。

物見やぐら

物見やぐらは、外敵を見張るのが主な目的ですが、吉野ヶ里の威容を示すシンボルとしての意味もあったと考えられます。

南内郭の物見やぐらは高さ12m、北内郭の物見やぐらは約10mで、柱は杉を使用しています。

物見やぐらの復元については、弥生土器に書かれている絵や古代中国の絵画資料、現在のアジア各地で昔ながらの生活をしている少数民族の建物の形などを参考にしています。



南内郭南西部の内壕の張り出し部



南内郭南東部の内壕の張り出し部



南内郭に復元された
物見やぐら

高床倉庫

「南内郭」の西側から多数の掘立柱建物跡が発見されています。これらの建物跡は、そのなりび方に規則性があり、大きな壕で厳重に囲まれていること、当時の水田があったと推定される低地部に近いこと、そばを川が流れ当時の交易で重要な役わりをはたした「舟」が利用できることなどから、米などの重要品を保管した高床倉庫群であったと考えられます。



発掘調査当時の高床倉庫群



復元整備された高床倉庫群



倉と市

城柵で厳重に囲われた高床倉庫群は、海外や国内のクニグニと取引をしていた「倉と市」として復元整備されています。この場所は、「市楼」という倉庫群を管理する建物を中心に米などの重要な物を保管していた特別な場所と考えられ、『魏志倭人伝』ではこのような倉を「邸閣」と表現しています。



倉と市

南のムラと祭壇

南のムラは、弥生時代前期(紀元前5世紀ごろ)から集落がつくられています。青銅器工場跡(青銅器をつくった場所)や「祭壇(まつりを行った場所)」も発見されており、稲作の他に、青銅器づくりや農具づくりなどを専門に行う人たちが住んでいた場所と考えられます。

吉野ヶ里では、弥生時代中期初め(紀元前2世紀ごろ)から青銅器がつくられています。朝鮮系無文土器とよばれる朝鮮半島の土器によく似た土器が発見されていることから、これらの青銅器の生産には、朝鮮半島からの渡来人が関係していたようです。

「祭壇」は「北墳丘墓」と同じ土を盛って人工的につくられた丘です。ここからは、まつりに使われた土器が多く出土しており、中には動物の骨や貝などの供物が入っているものもあることから、神や祖先などに祈りなどをささげた場所であったと考えられています。



南のムラ(南から)



「青銅器工場跡」… 鑄型・スズ(青銅器の原料)、フイゴの羽口(風をおくる管の一部)、鉄の小刀などが捨てられていました。



青銅器の
鑄型とスズ



朝鮮系無文土器



鉄の小刀
…右側の輪は青銅製



祭壇(まつりを行った場所)



供物の入った壺

きたないかく 北内郭

弥生時代後期後半(紀元後2世紀ごろ)～終末期(紀元後3世紀ごろ)に南内郭と同時に存在した二重の環壕に囲まれた部分を「北内郭」と呼んでいます。北内郭は、出入口が一つしかなく、南内郭以上に厳重なつくりとなっています。主祭殿とよばれる北内郭で最も大きな建物跡は16本柱の建物で、国内でも最大級の弥生時代の大型建物跡です。

この主祭殿は、中心線が北墳丘墓のそれと一致することから、祖先へのまつりを意識して建てられたようであり、北内郭はクニのまつりや政治を行うための特別な空間であり、吉野ヶ里遺跡では最も重要な場所であったのではないかと考えられています。



発掘調査中の北内郭(左下が北)



復元された北内郭(東から)



北内郭に埋められていた銅戈

主祭殿3階に
最高司祭者に
よる占いの
様子を再現
しているよ。



きゆうしつ 北内郭と宮室(主祭殿)

北内郭は、『魏志倭人伝』に書かれている「宮室(主祭殿)・「楼観(物見やぐら)」・「城柵(環壕・土塁・柵)」と発掘された建物跡が一致している場所でもあります。

当時は、吉野ヶ里を中心とするクニの重要な話し合いの時に、祖先や神の声を聞くことができる特殊な能力をもった最高司祭者に占ってもらい、物ごとを決めていたと考えられています。



復元された主祭殿



ふんきゅう ぼ 吉野ヶ里の墓地と墳丘墓



かめかん ぼ ち 甕棺墓地

弥生時代の墓地には、土を掘って遺体を直接埋葬する土壙墓や木の板を組み合わせて棺にした木棺墓、大きな甕や壺に遺体を埋葬する甕棺墓、板石を組み合わせて棺にした箱式石棺墓などの種類があります。このうち、甕棺墓は、佐賀県や福岡県など北部九州を中心に見られ、吉野ヶ里からは約3,100基の甕棺墓が発見されています。

吉野ヶ里では、弥生前期(紀元前5～3世紀ごろ)から土壙墓・木棺墓・甕棺墓がつくられ、弥生中期(紀元前2～1世紀頃)になると、大人用の大型甕棺が増え、それまで散らばっていた墓地がまとまり、丘の上に長さ600mにもなる列状の墓地群になります。

弥生中期には、これらの共同墓地とは別の場所に巨大な墳丘墓(「北墳丘墓」)がつくられ、赤や紫色に染められた絹の服を着て、銅剣やガラス管玉などの貴重品を身に着けた身分の高い人々が埋葬されました。

弥生後期(紀元1世紀ごろ)になると、甕棺墓の数がへり、土壙墓や箱式石棺墓が多くなりますが、吉野ヶ里の環壕集落が最も繁栄した弥生後期後半(紀元2～3世紀ごろ)の墓地は、ほとんど見つかっておらず謎となっています。



長大な列状の墓地群(志波屋四の坪地区)



甕棺墓
(志波屋四の坪地区)



箱式石棺墓
(志波屋四の坪地区)



復元整備された甕棺墓
(志波屋四の坪地区)

弥生人骨

吉野ヶ里からは、これまで約400体の弥生人骨が出土しており、これらの人骨は、現在も大学で分析や研究が行われています。

人骨の分析や研究により、吉野ヶ里の弥生人は、大人の男性で平均身長が163cmと高いことがわかっています。これは同時代の朝鮮半島から出土した人骨と類似点が多く、いわゆる渡来系弥生人骨であることがわかっています。

また、出土した人骨には、頭を切り取られ持ち去られたものや骨に刀傷があるものなど戦いの犠牲者と考えられるものもみられます。



甕棺に埋葬された人骨



顔が赤くぬられた人骨



腹部に10本の矢を射込まれた人骨



頭を切り取られた人骨

弥生人骨からわかること

- 発見された弥生人骨を調べてみると、男女の違いや年令、身長や体格、栄養状態などいろいろなことが分かるので、当時の人々のくらしを知る上でも、とても大切な資料となります。また近年、弥生人骨のDNAを調査することで、渡来人が朝鮮半島や中国のどこから来たかを調べる研究も進んでいます。
- 戦いの犠牲者と考えられる弥生人骨には、矢を射込まれたものや石剣や銅剣の先端や鉄の矢尻が骨に刺さったままのもの、骨に鋭利な刃物で切られた跡があるものもみられ、当時の戦いには弓矢の他に、石製や青銅製の短剣などの武器が使われていることがわかります。

巨大墳丘墓

北内郭の北側、一般の人々の共同墓地からはなれた位置に「北墳丘墓」と呼ばれる特別な墓地があります。南北約40m、東西27m以上で、平面形が長方形に近く盛り土され、この部分から弥生時代中期前半～中頃(紀元前2～1世紀ごろ)の14基の甕棺が発掘されました。

そのうち7基の甕棺からは銅剣が、1基からは剣とにぎる部分(柄)が一体となった「有柄銅剣」とガラス製管玉79個などの貴重な副葬品が発見されました。

この墳丘墓の年代は、復元された環壕集落のエリアよりも約200年古いのですが、吉野ヶ里集落の基礎を作り上げた歴代の王など身分の高い人たちの墓と考えられ、墳丘墓の東側から数百年にわたって使われたまつり用の土器が大量に見ついていることなどから、後の吉野ヶ里の人々から敬われ、あがめられていたようです。



発掘調査当時の北墳丘墓



覆い屋をかけ整備された北墳丘墓

北墳丘墓

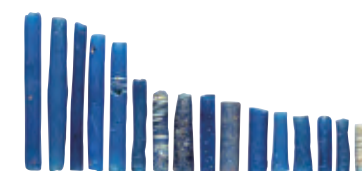
- 墳丘墓は「版築」とよばれる黒い土や黄色い土などの土をいく層にもつき固める古代中国の技法でつくられています。
- 現在、北墳丘墓の中を発掘された当時の姿で公開するため屋根がかけられており、発掘当時の本物の盛り土のようすや甕棺をそのまま見ることができるようになっています。



有柄銅剣とガラス管玉を副葬した甕棺墓



有柄銅剣と銅剣
【重要文化財】



ガラス製管玉
【重要文化財】



5 吉野ヶ里遺跡Q&A

※解答には
これ以外の
説もあるよ！



① 吉野ヶ里には、いつごろから人が住んでいたか？

吉野ヶ里からは、約2万年前の旧石器時代の石器(ナイフ形石器)が発見されているので、この頃から人々が住んでいたと考えられます。

② 当時の吉野ヶ里の人口はどれくらいだったのか？

住居の数やお墓の数をもとに推定すると、吉野ヶ里に住んでいた人数は、弥生時代中期の人口で約1,000人、後期には1,200人くらいと考えられます。その中でも、環壕の中に住んでいた人は300人程度と考えられます(大人約70人、下戸約230人)。

吉野ヶ里のクニの人口を考えた場合、周辺遺跡の人口を考えて約6,000人の人々が暮らしていたのではないかと考えられます。

③ 弥生時代の米は、赤米なのか？

米づくりは、今から約1万年前に中国の長江中・下流域で始まり、紀元前5世紀ごろ(約2500年前)、朝鮮半島をとって日本に伝わったと考えられています。日本に伝わった米は現在、我々が食べている米※と同じ種類で、長期の保存が可能なため、それまでの人々の生活を大きく変えました。

なお、弥生時代の米の色については、遺跡から出土する米が炭化して黒くなっているため、よくわかりませんが、奈良時代には、「古代米」と呼ばれる赤米や紫米、黒米などの米があったようですので、弥生時代に赤米があった可能性はあります。

※日本を含む東アジア地域では短粒米(ジャポニカ米)が主流で、タイなどの南アジア地域では、粘り気の少ない長粒米(インディカ米)が主流です。

④ 渡来人はどこから来たのか？

渡来人は朝鮮半島南部から来たと考えられています。渡来系弥生人の骨を観察すると、縄文人の骨よりも、顔のほりが浅く、背の高いことがわかります。これらの特徴を持った人骨は東アジア各地で見られますが、よく似ているというだけで渡来人の故郷とは断定できません。そこで、一緒に持ち込まれた米づくりの文化や住居の形、出土する土器、石器、青銅器などを比べると、朝鮮半島南部で出土するものとよく似ており、渡来人が朝鮮半島南部から来たことがわかります。

⑤ 縄文土器と弥生土器の違いは？

両方とも素焼きの土器ですが、縄文土器は、形が複雑で表面に縄目などの文様をつけたものが多く、全体的に厚くて黒っぽい色をしているのが特徴です。一方、弥生土器は形がシンプルで、文様は少なく、縄文土器と比べてうすく赤っぽい色をしているのが特徴です。作られた時期や地域によって形や文様、色にちがひがあります。

⑥ 『魏志倭人伝』とはどんな本か？

中国の晋時代の歴史家陳寿(紀元233～297)が編集した魏・呉・蜀の三国時代について記された歴史書である『三国志』の中の「魏書」に当時の日本(倭)について書かれた部分があり、これを『魏志倭人伝』と呼んでいます。

内容は、倭へ行くための道のり、風習や制度、産物、倭の地理などが紹介されています。特に魏に使いを送った邪馬台国は魏との細かなやりとりの内容、卑弥呼については女王になり死ぬまでの経緯が書かれています。

2000字あまりの本ですが日本の古代史に関する最古の史料で、弥生時代の日本の様子を知ることができる貴重な本です。

⑦ 吉野ヶ里は邪馬台国だったのか？

吉野ヶ里遺跡が邪馬台国だったという証拠は見つかっていません。ただ、見つかった建物跡などからは、『魏志倭人伝』に邪馬台国の様子として記された「宮室・楼観・城柵」と一致するため、邪馬台国をイメージできる遺跡として注目されています。

邪馬台国を特定するためには、魏の皇帝が卑弥呼に授けた金印や銅鏡などの発見が条件となります。また、これらの荷物に封をした「封泥」と呼ばれる粘土が見つければ、邪馬台国の有力な証拠となります。

⑧ 外環壕と内壕の違いは？

吉野ヶ里の弥生時代後期の外環壕は、集落全体を取り囲み、敵の侵入を防ぐための施設と考えられています。断面がV字形の深い壕で、全体の長さが2.5kmにもなり、これまで数度の掘直しがされていることがわかっています。

一方、内壕は、壕の断面がゆるやかな逆台形をしているところから、守りの施設と同時に特別な空間を仕切るための施設と考えられています。また、南内郭の内壕は弥生時代後期後半に広げられ、その時、南内郭の建物も作りかえられたようです。同じ時期に北内郭の建物と環壕(内壕・中壕)も整備されたようです。



⑨ 吉野ヶ里はなぜ壕の外側に土塁や柵があるのか？

環壕を発掘調査するときに、壕の断面を観察すると、土塁を築いたとき※に積み上げた土が壕の外側から壕内に流れ込んでいることがわかるので、土塁や柵が壕の外側に築かれていたと考えられます。

吉野ヶ里遺跡以外の多くの弥生時代の環壕集落でも同じ様子が見られます。

※土塁は壕を掘った土を積み上げて築くので、壕が埋まるときには、この土塁の土が壕内に流れ込んでいます。

⑩ 甕棺は日本全国で見つかったのか？

甕棺とは、素焼きの土器を使った棺のことで、弥生時代の甕棺は、北部九州(佐賀・福岡が中心)だけにしか見られないお墓です。甕の中に亡くなった人の手足を折り曲げて入れ、甕や壺、木や石の蓋をして、土の中に埋めています。

吉野ヶ里では主に弥生時代の前期末(紀元前2世紀ごろ)から後期前半(紀元後1世紀ごろ)の約200～300年間使われ、現在3,100基以上が確認されています。※

※「甕棺墓」以外にも「木棺墓」や「箱式石棺墓」、「土壇墓」などのお墓も見られます。

⑪ 甕棺にはどんな人が葬られているのか？

弥生時代の甕棺には男、女、子どもの区別なく、すべての人々が埋葬されていたようです。頭がなく肩や腕の骨に刃物による傷跡がある人、腹部に10本もの矢を射込まれている人などは、戦いの犠牲者※と考えられ、クニや集落同士で争いが行われていた当時の社会ようすを知ることができます。

また、北墳丘墓の甕棺は、墳丘(南北40m、東西27m以上の盛り土)に埋葬されており、一般の甕棺と比べると大型であり、銅剣などが埋葬されていることから、王などの身分の高い人たちが埋葬されていたと考えられます。

※10本の矢を射込まれた人は、処刑されたか、死後に儀式で矢を射込まれた可能性もあります。

⑫ 吉野ヶ里遺跡で出土した鉄製品にはどんな物があるか？

鎌・鍬などの農具や、斧・ノミ・ヤリガンナ・小刀などの工具、また、中国で作られたと考えられる重厚な鑄造鉄斧や蝶番などがあります。

吉野ヶ里遺跡出土の鉄製品の特徴は、国内で作った物のほかに、朝鮮半島や中国で作られた物も多く、朝鮮半島あるいは中国大陸から交易などによりいろいろな物を入手しやすかった北部九州の特徴を表していると言えます。



⑬ 弥生人は何歳くらいまで生きていたのか？

現在と比べると、寿命はずいぶん短かったようです。当時は栄養状態も良くなく、病院もありませんので、子ども(7、8歳くらいまで)の死亡率が特に高かったようです。吉野ヶ里の甕棺のうち、約5割が子ども用であることから、こうしたことが分かります。成人すると、40歳くらいと割と長く生きたようですが、それでも全体の平均寿命としては、30歳※以下だったと考えられています。

※25歳くらいだったという説もあります



⑭ 弥生人たちは、夫婦別々に住んでいたのか？

古代中国の歴史書『魏志倭人伝』には、当時の日本人(倭人)について、「大人※で4、5人、下戸※でも2、3人の妻を持つ」とか「父母兄弟はそれぞれ住む所がちがう」と書かれており、一人の夫が複数の妻をもち、夫婦は別れてくらし、子どもも成長すると家を出ていたことがわかります。

※大人…身分が上の人々 下戸…一般の人々

⑮ 弥生時代の人々はどんな物を食べていたのか？

縄文時代から食べていた、イノシシ・シカなどの肉や魚や貝、木の実などさまざまな海の幸・山の幸と大陸から新しく伝わった米や麦やアワ・ヒエなどの穀物を食べていたようです。弥生時代の遺跡からは、

- 穀物や野さい………… 小麦・アワ・キビ・豆・瓜など
- 木の実やくだもの… クリ・クルミ・ドングリ・モモ・ウメなど
- 動物や魚・貝 ……… イノシシ・シカ・鳥・タヌキ・熊・犬・フナ・コイ・サメ・スズキ・アジ・タニシ・カワナ・シジミなど

が出土しています。これらのものを煮たり焼いたりして食べていたのでしょう。『魏志倭人伝』によると、当時の弥生人はハシを使わず、手づかみで食べていたようです。

⑯ 当時の人々はどんな服を着ていたのか？

『魏志倭人伝』には、男性は布をただ体に結びつなげて身につけており、女性は布の中央に穴をあけ、そこから頭を通して着ていて、ぬう事はないとの記述がありますが、吉野ヶ里では、ソデをぬいつけたと考えられるぬい目のある絹布が発見されました。また、甕棺の中からは赤や紫に染色した絹や麻の布片が糸でぬいあわされた状態で見つかっています。当時は身分の差によって素材やデザインが違っていたと考えられます。

吉野ヶ里歴史公園の展示室における大人等の服は当時の中国のものや、古墳時代の壁画などに書かれたものを参考にして復元したものです。

⑰ 飲み水、風呂、トイレはどうしていたのか？

吉野ヶ里からは、弥生時代後期(紀元後1世紀ごろ)の井戸跡が2つ見つっていますが、飲み水には川の水も利用したと考えられます。

トイレの跡は見つかりませんが、長崎県壱岐市の「原の辻遺跡」では、環濠の中から人だけにしか見られない寄生虫が見つかり、トイレの可能性のある場所があります。人の排泄物が化石になったもの(「糞石」)が見つかる例もあり、それを調べると、当時の人々の食生活や病気などを知ることができます。

風呂については、まだこの時代にはありませんので、川で水遊びをしていたと考えられます。『魏志倭人伝』によると、「人が死ぬとみそぎをする。中国の沐浴と同じ」とあります。



⑱ 弥生時代に文字や言葉は使っていたのか？

弥生時代の文字や言葉については、はっきりと分かっていません。

当時の中国では外国との交渉、交流の時に文書で行うのが基本ですので、漢字や中国や朝鮮半島の言葉がわかる人たちがいたことは確かなようです。※

ただ、現在の日本語のように国内で通用する共通の言葉や文字があったのかは不明です。

※最近、吉野ヶ里遺跡や福岡県の糸島市や筑前町の弥生時代遺跡から硯が発見されており、弥生時代における文字の使用が学会で話題となり、注目されています！

⑲ 弥生時代以降の吉野ヶ里はどうなるのか？

古墳時代の初め(紀元3世紀後半ごろ)には吉野ヶ里の環濠はほぼ埋まり、北内郭や南内郭はなくなります。弥生時代の終わりとともに集落の大部分は、丘陵上から低地部に移動しますが、高床倉庫群付近や北内郭付近などでは、古墳時代初めになっても集落が続きます。また、南内郭付近の丘陵上には王や身分の高い人たちの墓と考えられる4基の前方後方墳や数基の方形周溝墓がつけられます。

古墳時代前期～後期(紀元4～6世紀ごろ)の約200年あまりの間は、吉野ヶ里の丘陵上に集落はなくなります。再び吉野ヶ里の丘陵上に集落がつくられるのは、約200年後の古墳時代後期(6世紀)以降になります。奈良時代(8世紀)には、郡の役所や官道(国道)などがつくられ、再びこの地域の中心として栄えます。



奈良時代の郡の役所跡と官道(西から)

⑳ 建物や城柵はどのようにして復元整備されたのか？

園内の竪穴住居や物見やぐらなどの建物、環濠や木柵などの復元整備では、発掘調査された遺構の規模や構造、弥生土器や銅鐸などに描かれた絵などを参考にしています。

また、『魏志倭人伝』などの記録、東アジア地域の民俗例などを参考に、考古学・歴史学・人類学・建築学・民俗学などさまざまな分野の研究者らによる会議によって当時の集落や建物の様子が復元されています。

㉑ 吉野ヶ里遺跡は国の特別史跡ですが、史跡と特別史跡のちがいは？

「文化財保護法」という法律で、「記念物(遺跡などのこと)のうち、重要なものを史跡に指定」し、さらに「特に重要なものを特別史跡に指定する」とさだめられています。

特別史跡は、国宝に相当し、「史跡のうち学術上の価値が特に高く、わが国文化の象徴たるもの」と規定されています。全国に「特別史跡」は62ヶ所あり、佐賀県では吉野ヶ里遺跡の他、名護屋城並陣跡(唐津市)、基肄城跡(基山町)の3ヶ所があります。



㉒ 吉野ヶ里遺跡は国営歴史公園として整備されていますが、国営公園とは？

国営公園は、国や地方公共団体(県・市町村)が目的に応じて作った公園や緑地である都市公園のうち国が作った公園を指します。①広いエリアからの来園を目的とするものや、②国の文化的資産の保護や活用のために作られたものがあります。吉野ヶ里歴史公園は②になります。

「国立公園」や「国定公園」などの自然や景観の保護などのために指定される公園は、自然公園とよびます。



修学旅行のようす 北内郭



世紀	時代	日本の主な出来事	吉野ヶ里の主な出来事
紀元前3万年頃 紀元前2万年頃 紀元前1万年頃	旧石器・縄文	ナウマン象やオオツノシカを追って移動生活をする この頃、土器がつくられはじめる 弓矢やつり針がつけられる	吉野ヶ里丘陵北部で人々の生活が始まる
紀元前4・5世紀	前期	朝鮮半島から米づくりが伝わる 北部九州各地で米づくりがはじまる	各所に小規模な集落がつけられる 丘陵の南はし周辺に環壕が掘られる
紀元前3世紀		北部九州で墓地に青銅器の副葬がはじまる 北部九州で青銅器の製作がはじまる	丘陵の南部に大規模な環壕集落がつけられる
紀元前2世紀	中期	北部九州で青銅器・鉄器を専門につくる集団ができる 中国から銅鏡や鉄器などがさかんに持ち込まれる	丘陵の南部の環壕が埋没し集落が拡大する 丘陵の南部で青銅器の製作が始まる 丘陵の上に長大な甕棺列埋葬がつけられる 王や身分が高い人たちの墓地(北墳丘墓)がつけられる
紀元前1世紀		倭国が百あまりの国に分かれる	丘陵の南部に新たな環壕が掘られる
1世紀	生	倭国が百あまりの国に分かれる 漢書地理誌	甕棺墓に中国鏡が副葬される
2世紀		奴国王が後漢に使者を送り、光武帝より「漢倭奴国王」金印などを授かる 57年 後漢書東夷伝	外環壕が掘られ、国内最大規模の環壕集落へと発展 南内郭がつけられる、巴形銅器等が製作される
3世紀	後期	倭国王の師升などが後漢に使者を送る 107年 後漢書東夷伝	南内郭が広がる、北内郭に中広銅戈が埋められ、祭殿がつけられる
4世紀		卑弥呼が魏に使者を送り、親魏倭王の称号と金印などを授かる 239年 魏志倭人伝	丘陵の北側に銅鐸が埋められる 外環壕が埋められ、北内郭・南内郭がなくなる
5世紀	古墳	この頃、卑弥呼が死亡し、再び倭国がみだれる 248年 吉与が女王に選ばれる、西晋に使者を送る 266年	前方後方墳などの王や身分が高い人たちの墓地がつけられる
6世紀以降		大和政権が成立 国内の統一が進む 筑紫国造磐井(現在の八女市一帯の豪族)の乱 527年 百濟より仏教が伝わる 538年	丘陵中央部に集落がつけられる 丘陵の北側に伊勢塚前方後円墳がつけられる





吉野ヶ里歴史公園で、
たくさん遊んで、
楽しく学んでね！

みんな
また来てね！
待ってるよ！

吉野ヶ里歴史公園のマスコット「ひみか」と「やよい」
提供：国営吉野ヶ里歴史公園事務所

発行

令和2(2020)年3月

編集

吉野ヶ里公園管理センター

住所：佐賀県神埼郡吉野ヶ里町田手1843

電話：0952-55-9333

F A X：0952-55-9330

<http://www.yoshinogari.jp>

印刷所

株式会社 三光